慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ネルヴァルの「幻想」に関する動性(ダイナミスム) (その一) : IllusionからInlusioへの劇
Sub Title	Dynamism in Nerval's fantasy (1)
Author	井田, 三夫(Ida, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.66- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ネルヴァルの「幻想」に関する動性（ディナミスム）（その一）

――Illusion から Inlusio への劇――

井田三夫

『ドルブルーズ覚え書』の中に次の言葉が見える。

「私は神に対して、諸々の事件は何も変えて欲しいとは望まない。ただ物事に対する私の関係の仕方を変えて欲しい。そして私のこうした考え方を神が認めてくれることを願う。要するに私の周囲にある種の魔術的世界を創造し、そうした世界のイリュージョンを私がしかと感じられるようにしてくれることを神に願う。」(1)

この言葉にネルヴァルの精神の在り方が端的に表現されているように思われる。すなわち、一般に後期のネルヴァルを特徴づけているといわれる夢や幻想への傾斜(Ⅰ)、あるいは世界が変わるとすれば自己が変わることである、という認識論上の自覚(Ⅱ)、それらがこの言葉の中に認められることである。しかも同覚え書がかかれたのはジャン・リッシェの推定によれば、(2)『幻想詩篇』や『オーレリア』といった神秘主義的傾向の著しい晩年の作品に二十年も先立つ時期、すなわち一八三〇年代であるという事実、われわれはこの事実にあらためて驚かされるのである。

ところで本稿においては主として(Ⅰ)の問題を取り上げることとなろう。すなわちネルヴァル文学のもつ幻想性ないし「幻想体」的構造性の意味するものを「演ずる」Jouer という概念に従って少しく検討してみたい。その場合、詳説する余裕はないが、ネルヴァル

にあっては「色褪せた散文的」現実に対する）Désillusion→Illusion（想像的なもの、ことばへの信頼）→Inlusio（救済幻想に基づく幸福感）→Illusion（その Inlusio の虚構性への覚醒及び狂気による幻覚）→Désillusion（現実への回帰及び最終的には創作力の涸渇からくる絶望）といった円環的な「幻想に関する動性（ディナミスム）」が認められのであるが、本稿ではそのうち Illusion から Inlusio への変容というプロセスのみを取り上げることとなろう。

（一）

唐突だが、ネルヴァルの作品にはJ・リッシェ[3]等のいう、いわゆる Double のテーマが数多く見い出される。通例「分身」あるいは「副身」と訳されているネルヴァル研究用語としての double とは彼の作品の中に描かれている互に似かよった二人の登場人物が対立的に分裂したネルヴァルの意識、人格を反映しつゝ、共有し合っていることをさすが、その例としてはたとえば『レ・ズィリュミネ』という作品の一部『ビセートル王』における王とラウル・スピファーヌ、『東邦紀行』の一部、『カリフ・アケム物語』におけるアケムとユズーフなどがあげられるが、私がここで特に注目したいのは『オーレリア』という小説の中に描かれている double である。理由は『オーレリア』における double が語り手「私」との関係で現われているからであり、さらにはそれがネルヴァル用語としての Double（分身）としての意味にとどまらず、より近代的意味合いでの、所謂自我（ないし意識）の二重性 dualité といった性格をも備えているからである。

Je vous ai raconté mes angoisses avec le sourire sur les lèvres, de peur de vous effrayer : je vous ai dit avec calme des choses dont vous n'avez pas frémi et qui tenaient tellement au cœur qu'il me semblait que j'en arrachais des fibres en vous parlant. Il semblait que je fisse pour ainsi dire l'analyse et la critique de mes émotions les plus chères, il semblait que je parlais d'un autre.[4]

語っている「私」と体験し感じている「私」とのこうした距たり。あるいは表現された「私」と生きられた持続 durée としての「私」との落差。ネルヴァルのこうした意識の二重性は『オーレリア』に至って「Double への hantise」[5]にまですすむ。

Mais quel était donc cet esprit qui était moi et en dehors de moi. Etait-ce le *Double* des légendes, ou ce frère mystique que les Orientaux appellent *Feroueïr*?—N'avais-je pas frappé de l'histoire de ce chevalier qui combattit toute une nuit dans une forêt contre un inconnu qui était lui-même[6] ?

こうしてネルヴァルはいたるところに「もう一人の者」[7] l'autre、すなわち「もう一人の自分」l'autre moi を見い出してしまうこととなる。ネルヴァルにとって自己救済の基礎となる筈の自身の identité、いわば自己の「即自」的な在り方を求めながら、現実には常に自己自身であってしかも自分にとって「他人」l'autre であるようなそういう「対自」的自己しか見い出せないということ。そこに見い出す自己が「永遠に変わらぬ真実の自己」seul moi véritable とはいつも違っている (autre) と感じてしまうということ。J-P・リシャールやジャン・リッシェも指摘する通り[8]、ここに彼の意識主体としての自己 Moi が自己の double、すなわち l'autre moi と衝突 conflit を起こす契機が内包されていることは次のことばによっても理解できる。

Il y a en tout homme un spectateur et un acteur, celui qui parle et celui qui répond. Les Orienaux ont vu là deux ennemis: le bon et le mauvais génie. 《Suis-je le bon? suis-je le mauvais? me disais-je. En tous cas, *l'autre* m'est hostile...》[9]

ネルヴァルがこのようなきわめて倫理的な問い方にこだわるのは彼が救済の前提と見做す自己純粋化[10]という固定観念にとりつかれていたからなのであるが、それはともあれネルヴァルは問いつづける。自分というものが double (二つに分かれている) と感ずるが真の自己、「善なる自己」は一体どちらであるのか。それは「もう一人の自分」l'autre を意識しているこの私自身 Moi なのか、それとも前者 l'autre moi なのか。決着は容易につきそうにない。J・リッシェやJ-P・リシャールはこの撰択を自らの死 (自殺) をもって行ったとしている[11]。すなわち自己の救済を保証された真の自己、彼のいう「良い自我」を決定的に解放するために、そうした「悪い自

我」や罪に汚れた者としての自分を滅ぼしてしまった、としている。果してそうか。私は一つの〝試み〟として、ネルヴァルのこの種の「自我の分裂」dédoublement du soi という問題を彼らとは別様な角度から検討してみたい。「同一化作用」Identification、ないし「演ずる」Jouer という概念がそれである。

すなわち、ネルヴァルは自己の内部に絶えず現われてくる（意識される）その「もう一人の者」l'autre を自意識としての「自分」l'autre moi と考えることをやめ、それを一個の「他人」un autre として考えていく。いいかえるなら彼の double たる「もう一人の自分」l'autre moi をある他人 un autre に同一化 identifier し、そこに成立する「自己=他人」un autre-moi を意識主体としての「私」Moi があたかも自己そのもの、真の自己であるかのように演じて jouer いこうとするのである。ネルヴァルはこうした Identification と「演ずること」Jouer を通して彼を苦しめてやまない自我の分裂という事態を止揚していこうとしたように思われる。

（二）

ネルヴァルはボードレールがそうであったように、[12]「変装」déguisement ということが大好きである。彼の作品の中にしばしば現われてくる子供時代の「結婚式遊び」[13] mariage fictif というエピソードもその一つのあらわれである。

「私はファンシェットに夢中になった。そして祖先の儀式に従って彼女と結婚しようという奇妙な考えを抱いた。私は祖母の古い衣裳を肩にかけて、式をとり行ないながら自分でこの結婚を祝った。［…］私は祖先たちの神と私がその聖像をもっていた聖母マリアとを証人に立てた。どちらもこの子供らしい無邪気な遊戯に喜んで立ち会ってくれた。[14]」

こうしたエピソードはネルヴァルがどんなに déguiser し、それを jouer しようとする激しい好み goût を、さらにいえばそういう obsession にとりつかれていたかを物語っている。

ところで、『シルヴィ』や『ファヴォール侯爵』などにも見えるこうした「結婚式遊び」というエピソードにあって「私」としてのネル

ヴァルは何に対して自己を同一化しているかといえば、それはたとえば「狩猟番人の婚礼衣裳」[15]を身につけた叔父の「十八世紀風の花婿」[16]に対してであり、こうした作品を書いている作者ネルヴァルにあっては子供時代の自己に対してである。ここでは後者の問題には触れまい。さしあたり問題なのは象徴的意義を帯びたこの種のエピソードそれ自身に認められる演技性、同一化作用である。ネルヴァルはこうして花婿に完全に自己を同一化し、「自己即花婿」としての un antre-moi を演ずるのである。

ネルヴァルのこうした自己を自己以外のものに変装し、それを演じようとする精神の在り方が反映されているのは先に述べた mari-age fictif のみではない。仮面舞踏会、さまざまな祝祭 fêtes、あるいは宗教的儀式といったもの、さらには文字通り、déguiser し、jouer するものとしての 芝居 théâtre、こうしたものに対する彼の異常な関心、愛着もまたそうした意識のあらわれであるように思われる。仮装ないし仮面舞踏会についての描写や言及はたとえば『ローレリ』第四章[17]、『シルヴィ』第十章『グラン・フリゼ』[18]『東方紀行』序文第八章[19]などに見られる。

次に祭り、祝祭に関する描写ないし言及にいたっては数え上げられぬ程、沢山見い出される。[20] その代表的なものとしては『シルヴィ』に繰り返し述べられているヴァロア地方の村々の鎮守祭 fête patronale[21] であり、殊にその「花束祭り」[22] fête du Bouquet などがあげられよう。「それは長い間忘れられていた田舎の想い出、幼い日の素朴な祭りの遠いこだまだった。—角笛と太鼓が遠くから村々にそして森から森に響きわたり、若い娘たちは花飾りを編み、唄をうたいながらリボンで飾った花束を調える。—雄牛たちの引く重々しい花車が通る道々でそれらの贈り物を受け取っていく。そしてそのあたりの子供の私たちは自分の弓と矢をたずさえ、騎士の身ごしらえで行列を作るのだ。—だが当時は知るよしもなかったのである、そうして自分たちが年々くり返しているのがほかでもない、数々の専制政治や新しい宗教の亡びたあとまでも生きのこってきたドリュイド教の祭式だったとは。」[23] ネルヴァルは祭り、ことに村の祭りが生み出す共同幻想性に—あたかもL・レヴィ=ブリュルのいう未開人における「集団表象」[24] représentation collective にも似た無意識的な、だが恐しいまでに強力な(祭りという)幻想体のもつ魔力、暗示力に—すすんで幻惑されてしまうのである。祭りの日に行われる各種の祭式や催し、たとえば仮装した子供たちの騎士行列[25]、巨大な花束の、神々の祭壇への奉献式[26]、夜の明けるまで開かれている踊り

の会[27]、そうしたものすべてがもつ幻想体の魔力に憑かれてしまうのである。そのようなある他者 un autre に自己を同一化 identification し、そこに成立する un autre-moi を全的に生き、演ずるのである。そうすることによって自我の分裂という事態が一時的であれ、消滅し、自己と世界との一体感を得る。ないしは得たという幻想を得る。

ネルヴァルのこうした精神の在り方は宗教的儀式についても事情はまったく同様である。たとえばサン・テチエンヌ教会、その荘厳でさん然と輝いている堂内での「礼拝の盛儀」la pompe *théâtrale* de l'office に関する熱っぽい描写[28]、等々。

最後に彼の演劇への関心があるが、これは彼の実人生においても、女優ジェニー・コロンとの関係から大きな意味をもっており、そのためこれまで多くのネルヴァリアン[29]によってとり上げられてきた問題だが、ここでは本題の性質上、その本質的な側面、すなわちネルヴァルという人とその作品のもつ演劇性 théâtralité ないし精神の演技性といった問題のみを取り上げていくこととしたい。

ネルヴァルの作品にはすでにとり上げた「結婚式遊び」mariage fictif や「ロンド遊び[30]」とともに「お芝居遊び」jeu de théâtre のエピソード、あるいは仮面劇や神秘劇に関する言及がしばしば見い出される。たとえば『散歩と回想』では

Ce fut lui qui m'enseigna l'art dramatique; nous représentions ensemble des petite comédies qu'ils improvisait avec esprit[31] とか『シルヴィ』第六章「オチス」では

…penser aux fées des Funamules qui cachent, sous leur masque ridé, un visage attrayant, qu'elles révèlent aux dénoûment, lorsqu' apparaît le temple de l'Amour et son soleil tournant qui rayonne de feux magiques[32]

などと見える。こうした例からわれわれはネルヴァルが仮装し、演ずることに異常な関心を持っているということが理解できる。この点で『東方紀行』の次のことばは恐らく決定的な意味を持っている。「私は自分の人生を一つの小説として送りたいのです。そしてどんなことをしてでも自分の周囲にドラマ、運命の結び目、好奇心、一言でいえばアクションを創造したいと望んでいる、そうした積極的で、き然とした小説中の主人公たちが遭遇する状況 situation の中に好んで自らを位置づけるのです。[33]」自己の生活ないし人生を一篇のロマンのように生きる、とはどういうことか。それは恐らく、小説中の主人公に自分をすっかり同一化し、それをあたかも真の

自己であるかのように「演ずる」ということに違いない。ここには「小説中の主人公即自己」、「自己即小説中の主人公」(un autre moi) という奇妙な矛盾式が成立している。ネルヴァルはそういう一見不合理な矛盾体としての un autre-moi を、演じていこうとするのである。

「…そうです、その晩から私の狂気 folie は自分がローマ人であり、皇帝であると信ずることでした。私の役が私そのものと一緒に(イダンティフィエ)なってしまいました。そしてネロの胴衣 tunique は私の四肢にべったりとくっつき、身体を燃え上がらせました。」[34]

こうして彼はある他者 un autre の中にすっかり没入してしまい、その中にあって un autre-moi を実現するのである。したがって、ここでは double 意識、自分がもう一人いるといった意識は消滅している。ネルヴァルはこの種の un autre(この場合、ネロ)を演じつくすことによって、かえって自己そのものを獲得するのであり、いわば自己の存在確証を得るのである。少なくともネルヴァルにとってはそのように思われるのである。次の一文もわれわれにこのことを確認させてくれる。

「御存知の通り、自分が想像した人物とすっかり同一化 identifie しなければ何も作り出せない物語作者がおります。」[35]

ところで彼は自分がネロとなり、ネロが自分であると本当にそう思うのであろうか。そうだとすれば文字通りの folie であろう。私としては彼はほとんど真面目にそう思うのであり、自らすすんでそう「思い込む」のだとみたい。『火の娘』序文や『シルヴィ』といった作品からうかがわれることは主人公「私」の背後にかくれている作者としてのネルヴァルはそのことの非現実性を気づいている、ということである。Identification という自己欺瞞、そういって悪ければ「自己暗示」[36]、それはネルヴァルにとって親しいものである。ところでここにいう「信じ込む」とはサルトルが『想像界』において述べている様な意味、すなわち「全的に非現実様式にもとづいて生きる」[37]という風に理解して一向に不都合はないのであるが、私にはネルヴァルにあってはもう少し強い意味があるように思われる。すなわち、ネルヴァルの場合、「これは虚構なのだ」という意識が文字通り消えてしまうことはないにしても、『未開人の心性』などの中でレヴィ=ブリュルが問題にしている意味[38]、あるいは『ホモ・ルーデンス』の中でホイジンガーが次のように語る場合の意味をも決して失っていないのである。

「未開人は存在と遊戯を区別できない。つまりその存在であることと、その存在を演ずることとの間に何んら概念上の差別を知らない。〈同一化〉とか〈イメージ〉、〈象徴〉ということを彼は何一つ知りはしない。したがってわれわれがここで〈遊戯する(演ずる)〉という普通的なことばに強くこだわることで、祭儀を営んでいる時の未開人の精神状態を最もよく会得することができるか、どうかこれは解ききれない疑問として残らざるを得ない。われわれの理解する遊戯 play という概念の中では本当に信じていることと、信じているように見せかけることとの間の区別が消えてしまうのだ。[39]」

ネルヴァルは存在 Être と信念 Goyance の区別を決して知らない訳ではなく、その意味で彼を未開人と同一の次元で論ずるのはいささか暴論のようにも見える。だが、それにもかかわらずネルヴァルの場合、identification といい、jouer といい、その渦中にあっては存在 Être と演技 Paraître との間の区別が一時的であれ消えてしまう(知らないのではない)ということが起こるのである。「ああ、私は自分がそんな恋人であり、そのような病人であると思っている(にすぎない)のではなかろうか!でも私は自分がそうであると思えば、実際そうなのです![40]」こうした存在 Être と信念 Croyance との混同[41]は彼の病気(精神病)によって起こるとも、あるいは多くの評者がそう理解している如く、[42]彼のオキュルティスム、神秘的ピタゴリスム信仰のために生ずるともいえようが、私には必ずしもそうは思われない。全的に「演ずる」ということの極限には正常な精神(状態)にあっても、そのような区別を消滅させる微妙な領域があり得るのである。だがこのことはさして問題ではない。問題はそのように自己を他者 un autre の中に没入させることによって、彼は自意識としての自己と他者との統一体たる一者 un autre-moi と化しているということ、そうすることによって少なくともそれを演じて(同一化して)いる間は自我の分裂 dédoublement du soi といった事態を完全といえるまでに止揚しているということ、である。こうしてネルヴァルは自己の内部に Moi と敵対するものとしての彼の double、すなわち「もう一人の自分」l'autre moi を意識することなく、他者即自己、自己即他者という一者存在所有の幻想 illusion に満たされることとなる。ところでこの "illusion" という言葉は語源的にはラテン語の "Inlusio" である。そしてこの "inlusio" とはホイジンガーによれば[43] in-lusio(←in-ludo)、英語の in-play(遊びの状態で)であり、これは harmonie ないし平衡ということを意味する。フランス語においても機械用語として

jeu という言葉に（機械の）遊び、すなわち（活動の）自由、といった意味が残っているが、そのような自由、バランスを得た天秤のもつ自由な状態、それが“inlusio”の意味でもある。

ネルヴァルは un autre-moi を演ずることによって、右に述べた意味での〈幻想〉を、すなわち存在への〈即融幻想〉Inlusio de l'assimilation を得るのであり、心理的には精神の〈内的平衡感〉Inlusio inténieure といったものを得るにいたるのである。

ところで、精神の「自由な状態」といい、「内的平衡感」といい、それらは演じている限りにおいてのみ成立し得るものであることはいうまでもない。厳密にいうならそれらは作品—un autre-moi が実現し得る殆んど唯一の場—を書く、というプロセスの外には成立しがたい心的状態なのである。この意味でそうした内的 Inlusio とは演ずる、という行為の外から眺めた場合、Illusion 存在となっており、他方、その Illusion は演ずるということそれ自体から眺めた場合、Inlusio 存在として成立している、といえよう。

J-P・リシャールはネルヴァルのこうした un autre（引用した例では『火の娘』序文中の皇帝ネロ）への全的な没入、それへの cohésion という現象をそれが彼の folie の一因である、と消極的に解釈しているが[44]、私にはそう思われない。ネルヴァルのこうした現象は上に述べてきたような積極的な意義を担っているように思われるのである。

ネルヴァルは変装 déguiser し、演ずる jouer ことの裡に、そのような精神のドラマを実現させていたように思われる。

（三）

ネルヴァルにとって、「書く」ということ Écriture、それもまた「演ずる」ことに他ならなかった。すなわち彼にとって作品を書くとは、彼の悲哀、苦悩、現在であれ、過去であれ、自己の人生を何らかの意味で「演ずる」ことであった。そしてこの場合、「演ずる」とは「かざる」ことでもあった。「かざる」とは仮装する déguiser することでもあり、これは汚れたもの、悲惨なもの—存在の苦

悩—を慈しむことであり、それらを意味づけることであった。いいかえればそれらをより美しく、より荘厳に、より真実らしくつくり直すこと recréation であった。悲哀存在としての「この世」なるものの一切を自己の夢 rêves や幻想 illusions でかざり、荘厳化していく、ということ。ここからネルヴァルのことば（文学）への志向がはじまる。

……それにしても「かざる」とは一体どういうことであろうか。「かざる」とは美しくないものをたんに美しく見せようとすることだけを意味するのだろうか。「かざる」とは「現実逃避」という茶番的自己欺瞞の別名にすぎないのであろうか。だがネルヴァルにおける「かざる」というあり方がたんにそれだけを意味するのだとすれば、このことばをどのように理解したらいいのだろうか。Les frères de Jésus-Christ l'ont condamné à mort—Ses apôtres l'ont renié; aucum ne s'est fait tuer pour lui…qu'après.—Ils doutaient tous.(45) ここには汚れきったもの、すなわち信じようにも信じ得ないものを、それでもなお信じようとする者のぎりぎりの魂の苦悩、いわば復活以前のキリストの原体験といったものにかぎりなく迫ろうとする者のこえが聞かれる。そのように信じ得ないものを信じ得えないものとしてどこまでもつきつめたもののみが、この「かざる」ということの真の意味を、「かりに意味づける」ということの真の意義を知っているように思われる。なぜなら、「真」（そのもの）というあり方は「如」（ごとく）というあり方を通してしか得られないものであり、その場合「かりに」とはもはや文字通りそうであることをやめ、「真に」というあり方とほとんど同義であることをその人はよく知っているからである。このことを知ったときから、かざろうとする意志、すなわち「荘厳化への意志」がはじまる。自己のみでなく世界すら、ますます美しく、ますます荘厳にみせようとすること、この世界（自己）装飾化、荘厳化への意志、倫理的にいいかえるなら、かりに意味づけようとする意志、それが一般にいわれるネルヴァルの夢 rêves なるもの、幻想的 fantasfgue なるもの、あるいは神秘的 mystique なものへの異常なまでの愛着 goût にかくされている内的意義に他ならない。

ネルヴァルの精神のこうした傾向、汚れ（苦悩）をかざり（意味づけ）、そのかざられた美しい世界、それのみを生き、演じようとする傾向、それはたとえば次のようなことばに認められる。

Le riche peut garder longtemps la fraîcheur de ses illusions, comme ces primeurs et ces fleurs rares qu'on obtient

chèrement au milieu de l'hiver; mais le pauvre est bien forcé de subir enfin la triste réalité que l'imagination avait dissimule longtemps[46] ネルヴァルはこの「悲しい現実」la triste réalité を夢や幻想、ここで彼のいう「想像力」l'imagination によって「忘れよう」とするのである。

「今日はもう一度、人生（現実）を忘れよう。[47]」Oublions la vie encore aujoud'hui.

この場合、「忘れる」とは汚れ、すなわち現実の苦悩を「慈しむ」こと、すなわち「かざる」ことを意味している。「かざる」ということのうちに含まれる幻想の魔力にいつまでも酔っていたいのである。そういって悪ければ、そのかざられた在り方を楽しみ、演じていたいのである（Laissez-moi mon illusion!）[48]。

「こうしたことが正に夢 rêves と幻想 illusion の国（オリエント）の姿です。そこでは醜さはある種の犯罪のように隠されております。だから人々はそこにいつもフォルム、愛、青春、美なるものの何かしらを垣間見ることができます。[49]」

ネルヴァルのこうした「かくし、かざろう」とすることへの興味、それは彼の〈荘厳化への意志〉という精神の在り方と深く係わり合っているものなのである。

ネルヴァルの夢や幻想の問題はすでに多くのことが語られてきているので、[50] ここではそれが私のテーマに関連する側面のみを検討するにとどめたい。すなわち、この問題を〈書く=演ずる〉ということとの関連から考えていくこととしたい。

ネルヴァルにとって「書く」とはアウェルバッハ流にいうなら、[51]「魔術的な美しい世界」un bel univers magique を再創造 recréation し、それを遊化 récréation することであった。

「そしてそこに一つの幻影 illusion、一つの夢 rêve、ある種の輝かしい幻 vision lumineuse がやはり存在するのです！無論それらはポエジーがわれわれに創造してくれたこうした魔術的な美しい世界のうちにおいてのみ成立しているものではあるが……そうした魔術的世界にあっては一切が和合し合い、一切が自然の生み出す作品や人間が自然に手を加えてつくり出す作品よりも、より美

しく、より荘厳で grand あり、より豊かなのである。そして恐らくより真実なのである。[52]」

彼にとってはポエジーが現成させるこの「魔術的世界」のほうが所謂日常的な現実世界よりも一層「真実」なのである。こうした考え方は他の作品、たとえば『オーレリア』[53]や『火の娘』序文[54]、あるいは書簡[55]などにもしばしば見い出されるネルヴァルに親しい思想であるが、この問題はすでに他処で扱ったので、ここで再びとり上げることはすまい。ただ注目すべきことはそれらの例がいずれも plus réel ではなく、plus vrai と表現されていることである。そこに夢や想像世界を客観的現実と同一視し、前者をあたかも後者のごとく「演じて」いるのだ、という意識が読みとれることである。

「ところで真実なるもの le vrai、それは虚構的なもの le faux である、—少なくとも芸術作品やポエジーにあってはそうである。『イーリアス』や『アエネアス』、『解放されたエレサレム』、あるいは『アンリヤード』にまさるウソが一体あるだろうか？［…］それに、と私の裡の批評家がいう、私はこの種のウソ（なるもの）が好きなのだ。[56]」

彼にとって「真実なるもの」le vrai はウソの中にしか、すなわち事実 le réel の中にではなく、夢や想像世界の中にしか存在しないのである。それに彼はウソでありながら真実でもあるそういう想像界を演じ、遊化すること—「遊化」とは遊びつつ一個の他者と化すことである—を愛するのである。

この場合、「演ずる」とは睡眠時の夢や子供時代に得た幻想 fantaisies などを手がかりとして、ウソでありながら真実である世界—「美しい魔術的世界」—をますます豊かに「つくり直す」recréer ことそれ自体である。すなわち表現行為それ自体である。「子供の頭の中でこのように形成された世界は非常に豊かであり、とても美しいので、人はそうした世界がその後に得たさまざまな想念 l'dées が誇張された結果でき上がったものであるのか、それとも以前の生 existence antérieure を想起して生じたものであるのか、さらには未知なる世界の魔術的現実 géographie magique d'une planète inconnue であるのかわからなくなってしまうのである。[57]」ネルヴァルの作品に描かれている睡眠時の夢 rêves、狂気にともなう幻覚 hallucinations、あるいは覚醒時の夢想 rêveries といったものの区別が判然としない理由の一つがここにある。つまりそれらは表現の過程で「誇張され」exagérés、豊かにされ、再構成されて（Re.

composons nos souvenirs)[58] いるのである。

ところでネルヴァルは何故これほどまでに夢の世界を生きようとしたのだろうか。自己の人生やこの世なるものの一切をかざろうとしたのであろうか。理由は彼が〈救済コンプレックス〉に憑かれていたからである。ネルヴァルは「救済への渇望」[59] désir du salut に身を焼かれながら、己れが「汚れて」scandalisé いる（信仰への道に躓いている）故に真の魂の救済が得られないことを自ら気づいているのである。そこで彼は汚れたままで、その汚れを、一個の美にいたるまで、換言するなら一個の意味にいたるまで、かざっていく。すなわち正統的な信仰によって―純粋化への意志[60]によってではなく、文学（ポエジー）によって―かざろうとする意志、荘厳化への意志によって、救済を得ようとする。

ネルヴァルはキリストとともにキリスト以前のキリストの苦悩、復活以前のキリストの苦悩に充分に耐えたろうか。ネルヴァルの文学は「不幸は不幸のままだ」という意識に耐えつづけることの中から生れてきたことばだろうか。そうであるともいえるし、ないともいえる。なぜなら、彼はなるほど「書く」ということを通して実現される幻想世界の裡に自己の不幸や苦悩の意味、それらに耐える力―いわば現実慈悲力とでも呼び得るもの―を求めたことは事実であり、この限りにおいては充分に耐え得なかったともいい得よう。が他方において、ネルヴァルに認められるそのようなかざろうとする意志、かりに意味づけようとする意志、それは「不幸は不幸のままだ」という意識に充分耐え得た人もまた持ちうる訳であり、すでに述べたとおり、その人のみがかざるということの真の意味を知っている、という意味において充分に耐えたといい得よう。

ところで、彼は自己や世界は汚れているのではなく、汚したのだということ、この世に不幸はなく不幸の意識があるだけだということを知らないではない。知っているにもかかわらず、この「重大な障害」[61] barrière grave―汚れ―意識―人間的意味づけ―を超えることができないのである。というより、むしろ信じ得ないものを信じ得ないものとしてどこまでもつきつめていこうとするのである。Il ne faut pas faire si bon marché de la raison humaine, que de croire qu'elle gagne quelque chose à s'humilier tout entière, [……] et quel est le père qui se complairait à voir son fils abdiquer devant lui toute raisonnement et toute fierté![62] ここか

ら、かざろうとする意志、荘厳化への意志がはじまる。擬信仰、擬意味づけ、擬天国、それらを成立させる場としてポエジー（文学）がある。だがこの場合、「擬」という冠辞は、少なくともネルヴァルにとっては殆んど意味をなさない。なぜなら「擬」ということの究極的な在り方は「真」という在り方にかぎりなく近いものであることを彼は知っているからである。そのようなものとしての夢の世界、ポエジーの世界を彼は生きるのであり、それらを通しての救済という道を積極的に選びとっていくのである。

ところで「書く」という行為によって豊かにされる夢の世界、彼のいう「魔術的な美しい世界」un bel nnivers magique、ネルヴァルがそのような世界のイマージュ化にもっとも見事に成功しているのは『オーレリア』最終章に続く『メモラーブル』においてであろう。この『メモラーブル』はその表現において、その美しさにおいて、その深さにおいてネルヴァル文学の極北といえよう。それ故ここでは彼の救済の問題ないし自我の分裂 dédoublement du soi といった問題と関連づけながら、この『メモラーブル』のもつ問題性を検討してみよう。

『メモラーブル』はネルヴァル的救済を予感させる、「魔術的な美しい世界」を喚気する無数のイマージュに満ちている。

Sur les montagnes de l'Himalaya une petite fleur est née—Ne m'oubliez pas!—Le regard chatoyant d'une étoile s'est fixé un instant sur elle, et une réponse s'est fait entendre dans un doux langage étranger.—*Myosotis!*

Une perle d'argent brillait dans le sable; une perle d'or étincelait au ciel...Le monde était créé. Chastes amours, divins soupirs! enflammez la sainte montagne...car vous avez des frères dans les vallées et des sœurs timides qui se dérobent au sein des bois!

Bosquets embaumés de Paphos, vous ne valez pas ces retraites où l'on respire à pleins poumons l'air vivifiant de la Patrie.—《Là-haut, sur les montagnes,—le monde y vit content;—le rossignol sauvage—fait mon contentement!》(63)

一切が交感し合い、祝福し合う、文字通り存在に対する「やさしさ」と「親しさ（アンチミテ）」の回復された世界。ことばを通し、ことばによってのみ実現されたこの「ランボー的新鮮さ」(64) l'inoui rimbaldien に満ちた世界。ネルヴァルのこうした inconnu ないし inoui な現実

感、それを「書く」という行為を通してのみ「体験」し得たのである。「書く」ことにはじめて教えられた不思議な想像的現実。それは書きながら、ことばがことばを求め合い、まさぐり合い、確かめ合って自ら生れてきたことばの世界なのである。ことばのもつ音楽性、それがことばからことばへと響き合い、照応し合いながら喚起するある内在的 immanent な実在感。ところでことばの連想想起を通して現成されるこうした不思議な世界はやがてその頂点に達する。

Du sein des ténèbres muettes deux notes ont résonné, l'une grave, l'autre aiguë,—et l'orbe éternel s'est mis à tourner aussitôt. Sois bénie, ô première octave qui commenças l'hymne divin! Du dimanche au dimanche enlace tous les jours dans ton réseau magique. Les monts te chantent aux vallées, les sources aux rivières, les rivières aux fleuves, et les fleuves à l'Océan; l'air vibre, et la lumière brise harmonieusement les fleurs naissantes. Un soupir, un frisson d'amour sort du sein gonflé de la terre, et le chœur des astres se déroule dans l'infini; il s'écarte et revient sur lui-même, se resserre et s'épanouit, et sème au loin les germes des créations nouvelles.[65]

これがいわゆる「無限に神秘的ではあるが同時に限りなく現実的[66]」な現実、「新しい現実[67]」une réalité nouvelle—ネルヴァルのいう「第二の生[68]」une seconde vie というもののイマージュに他ならない。そして、こうした世界の発見—厳密にいうなら発明 invention、それが彼の夢の探求(それを彼は descente aux enfers と名づける)の一つの意義であった。ここでは「主観的な在り方がある新しい現実の発見と同じ意義をもち、ある究極的な客観性といったものと再び接合している[69]」le subjectivisme équivaut à la découverte d'une réalité nouvelle et rejoint une objectivité supérieure のである。そして何よりも肝心なことはこうした「究極的現実[70]」l'ultime réalité が「ことばのもつ暗示的な音楽性[71]」によってのみ、その存在を保証されていることである。いいかえるならこうした merveilleux な世界、新しい現実といったものはことばを通し、ことばの中にのみ成立していることである。この世界は言語によって成立しているという限りにおいて幻想構造性をまぬがれ得ていないにもかかわらず、その神秘的な言語の暗示力を通して、いわば一個の「幻想体構造」性を獲得しているのである。すなわちボリス・ド・シュレッツェルのことばを借りれば[72]、sens としての ultime réalité が forme

としてのことばそのもの、ないしことばのもつ音楽性の中に immanent に存在しているということ。彼がこの『メモラーブル』を〈書き=演じ〉ながら、あたかも存在そのものを、さらにいえば自己の救済そのものすら獲得しつつあるように感ずることができたのはこのような理由によるのである。

リシャールも指摘するように[73]、『メモラーブル』におけることば mots は monovalents であり、アウェルバッハのいう〈ブライ的、旧約的な問題性、悲劇性、深淵性 Profondeur というものに無縁であり、それは「ただ一つの感情、ただ一つの場面」[74] un seul sentiment ou un seul spectacle を表現しているだけなのである。さらにそのことばは「フラ・アンジェリコの色彩のように」[75]存在の「単一性」unicité を暗示し、意識の「分裂」[76] dédoublement や潜在意識 arrière-pensée といったものを決して感じさせない。それ故もしこうした言語世界に Profondeur というものがなお感じられるとすれば、それは「水平的に生れる」[77] nait horizontalement のである。そこにリシャールのいうランボー的新鮮さや水平的な深さ profondeur horizontale、あるいは A・ベギャンのいう新しい現実が感じられるにしても、要するにネルヴァルのこの世界は「言語の表面性の裡に」[78] dans une superficialité du langage、私にいわせれば「言語の人工性の中に」dans une artificialité du langage、そういって悪ければ言語の魔術性の中に成立しているのである。この世界はどこまでいっても「ことば」langage 自身のもつ体臭をかすかに漂わせている。澄明だがある種の匂いを放つことばの粘液につつまれている。すなわちこの世界はどこかにかくされていると思われることばのホゾの緒を通して〈主観性〉に結ばれている。その意味で私には『メモラーブル』の世界はその新鮮さ、澄明性などにおいて一見ランボー的でありながら、本質的にはそれとはまったく異質であるように感じられる。両者の詩質はいわば化学でいう「異性体」構造の関係にあるように思われる。[79]

こうして世界はその絶対的な明澄性のうちに自らと「和解」[80]し、「讃歌」hymne divine によって贖罪され、祝福されるにいたるのである。そこでは人間も、鳥も花も、山々も、小川も、すべてのものが存在の同一平面、水平的水準 plan horizontal に生起し、互に呼びかけ合い、答え合い、歌い合っているのである。すべてが一つの宇宙的な歌—『メモラーブル』の言語自体がすでにそれを暗示して

いる—のもつ音響性と運動性によって存在の単一性 unicité と一者性 unité とを実現しつつ、歓び合っているのである。要するにそこではすべての存在がネルヴァル的言語魔術を通して「永遠の現在」[81]の中に、そしてさらに、A・ベキャンのいう「原初的な完璧性」[82] perfection originelle の裡に生起しているのである。

ところで、この魔術的な言語世界、そしてこれを支えていることばのもつ、こうした単一性や合一性 Unité、あるいは音楽的な調和、それらはこの世界を創造しつつ、演じている作者にして主人公であるネルヴァルの自我の分裂が止揚されつつあることを、リッシェのことばによるならネルヴァルの「対立する自我の両半分」deux moitiés antagonistes du moi が「和解」[83] réconciliation しつつあることを暗示しているように思われる。それらはまた彼が『メモラーブル』という作品を書きながら、ある種の魂の平衡感、浄福感といったものを所有しつつあることを象徴的に示しているようにも思われる。

このように「書く」という行為によって荘厳化され（かざられ）、豊かにされた夢、いいかえれば秩序づけられ、意味づけられた『メモラーブル』における夢 rêves や幻覚 illusions、それらはネルヴァルにとって、もはや単なる rêves や illusions ではなく一個の réalité nouvelle（すなわち彼のいう une seconde vie）でもあり、一つの Inlusio（調和、平衡）でさえあり得たのである。この場合、Inlusio とはたんに『メモラーブル』の世界それ自身のもつ「絶対的な完璧性」[84]や存在の「合一性」[85] l'Unité といったものを意味するだけでなく、ネルヴァルが作者兼主人公「私」として、この世界を〈書き＝演じ〉ながら、所有したと思われるある種の魂の平衡感、浄福感といったものをも含まれる。このように Illusion が Inlusio であり得ている時ネルヴァルは書くことが「演ずる」ことであるという経緯（いきさつ）を殆んど忘れているのである。「忘れている」とは〝幻想の幻想性〟、すなわちその虚構性を意識しない、ということであり、文学（ポエジー）による救済の幻想 Illusion をほとんど本物と思い込む、ということである。「書く」という行為が宗教的な「行」であると思い込むことである。汚れ（文学）を清浄（宗教）と思い込むことである。こうしてネルヴァルの文学（ポエジー）による一切荘厳化の試みは完成される。すなわち、書くことによって、書くことを通し、書くことのうちに精神の平衡 Inlusio de l'âme、ないし救済幻想にもとづく浄福感 Euphorie といったものを獲得するにいたるのである。

〝荘厳化〞（かざること、演ずること、仮りに意味づけること）の過程の極限としての、この〈Illusion〉から〈Inlusio〉への変容のドラマ、Paraître (Jouer) から (Pseud-) Etre への変容のドラマ。これがネルヴァルにおける「書く」ということ Écriture の本質的な意味であり、彼の文学の意味に他ならない。

ネルヴァルにとって「書く」とはそれほどまでに重大な意義を―強いていうなら認識論的な意義を―担っていたのである。ネルヴァルが「私は夢を定着させ（作品化し）、その秘密を探そうと決心した」[86]とか「私は自分の夢の意味を探ろうとした」[87]とかいい、さらには「私は神に諸々の事件を変えることではなく、ものごとに対する私の関係の仕方を変えてくれるよう願う。同様に私の周囲に私の属する世界を創造する力を、私の永遠の夢を受身にではなく、自ら支配する力を私に残しておいてくれるよう、神に願う。ところでそうなれば自分が神だということになるが。」[88]という時、それは彼が「書く」ということそれ自身のもつ、こうした力を知っていたのであり、その意味でここにいう「神」Dieu とは「書く」という行為それ自体ですらあり得るのである。すなわち「書く」ということ、それが世界に対する自己の在り方を変容させ得るのであり、たとえば『メモラーブル』において認められるような新しい現実認識を可能にし得るのである。世界に革命があるとすれば、それは自己の内部にしかあり得ない、という認識論。Les événements n'existent que par rapport aux âmes[89] 世界が変わるとすれば、それに対する自己の在り方、すなわち意識が変革されることであるというネルヴァル的認識論。このような世界認識を確実に信ずることができるのはこの「書く」ということを通してであり、その裡においてなのである。それ故ネルヴァルはこの『メモラーブル』の世界を創造し得た人として、ここにいう「神」にすら現になり得ているのである。

「書く」ことが本質的に「かざる」こと(荘厳化)、すなわち「かりに意味づける」ことであり、この意味において「演ずる」ことであるにしても、そのためにこの Illusion から Inlusion への変容のドラマが変更を受けることはない。なぜならすでに見た通り、「演ずる」ことの究極的領域にあっては存在と演技との区別が消滅する―あるいはそれが意識されない―ということがあり得たと同じように、「書く」ということもまた、その荘厳化への意志の極限にあって、こうした意識の変容―新しい現実認識―を可能にし得るからである。

註 1、Jean Richer 編 G. de Nerval, *Le Carnet de Dolbreuse*, Paris. Minard, 1959, p. 70.

2、Ibid, p. 11,

3、cf. Jean Richer: *Nerval et Ses Fantômes*, dans le *Mercure de France* n° 1054. 1951, pp. 282-301. その他同氏よる *Nerval, expérience et création*, Hachette, 1963, の序文 pp. 11-25, 及び pp. 479-480, pp. 509-516, pp. 583-585. あるいは J.-P. Richard: *Poésie et Profondeur*, éd. du Seuil, 1955, pp. 60-62.; A. Béguin: *Gérard de Nerval*, éd. José Corti, 1945, p. 40, p. 50 など

4、Œuves I, *éd* Pléiade, p. 1952, p. 724, *Letters à Jenny Colon*

5、A. Béguin: *Gérard de Nerval*, éd. José Corti, 1945. p. 50.

6、*Œuvres I*. éd. Pléiade, 1952, p. 385 (以下 Œuvres I, éd. Plé. と略)

7、Ibid., p. 385.

8、Jean Richer: *Nerval et Ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951. p. 300; J.-P. Richard *Poésie et Profondeur* éd. du Seuil, p. 61.

9、*Œuvres I*, éd. Plé., p. 385.

10、ネルヴァルにおける倫理的、美学的な純粋性 pureté ならし「純粋性〈の好み」le goût pour la pureté という問題は A. Béguin (*Gérard de Nerval*, José Corti, 1945) Jean Richer (*Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951)、さらに Pierre Schneider (*Nerval ou le Devoir de Pureté*, dans le *Mercure de France*, dec. 1949) などが取り上げているが、私の知るかぎりこの問題に関する本格的な研究論文はまだ現われていないようである。その倫理的側面に関してのみいえば、これは要するに「漠然たる罪の意識」(J. Richer) に基いた、自己及び自己の存在 existence を宗教的に清浄化 Purification することによって魂の救済を得ようとするネルヴァルの精神傾向をさす。これは Bachelard 流にいうなら、ネルヴァルの「救済への欲求」(A. Béguin) に根ざした、いわば〈純粋ーコンプレックス〉Complexe de Pureté と呼ばれて然るべきものである。

11、Jean Richer: *Nerval et Ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951, pp. 291-292, p. 300; J.-P. Richard; *Poésie et Profondeur*, éd. du Seuil, 1955, p. 62.

12、J.-P. Sartre: *Baudelaire*, éd. Gallimard, 1949. pp. 179–183.
13、*Œuvres I*. éd. Plé., P. 1196, notes de *Sylvie* par Jean Richer.
14、Ibid., p. 160.
15、Ibid., p. 280.
16、Ibid., p. 280.
17、*Œuvres II*, éd., Plé., p. 762.
18、*Œuvres I*, éd. Plé., p. 288.
19、*Œuvres II*, éd., pp. 44–45.
20、①*Voyage en Orient* では Œuvres II, pp. 44, 45, 98, 300, 309 あるいは *Les Nuits de Ramazan* 第II章 Théâtres et Fêtes, ibid. pp. 469–498, 第IV章第3節 Fêtes du Sérai, ibid, pp. 617–619 etc. ②*Notes de Voyage* では ibid, p. 892, etc. ③*Lorély* では Les Fêtes de Hollande の特に第V章 ibid, pp, 839–943, あるいは Fêtes de Weimar 第IV章 ibid, pp. 788–791. ④*Promenades et Souvenirs* では *Œuvres, I, p.* 150.
21、*Œuvres I*. éd. Plé., p. 268.
22、Ibid., p. 286.
23、Ibid., p. 268.
24、レヴィ＝ブリュルのいう未開社会に内在する「集団表象」représentaiton collective とは、それなしには知覚された事物の了解作用 compréhension が成立しないようなそういう個に働く集団的な心的規制力、「秘教的な魔力」puissance occulte をいう。なお詳しくは同著者による *Les Fonctions Mentales dans les sociétés inférieures*, éd. Félix Alcan, 1928 の第一章「未開人の知覚作用における集団表象及びその神秘的性格」を参照。
25、*Œuvres I*, éd. Plé., p. 268.
26、Ibid, p. 273.
27、Ibid., p. 283.

28′ *Œuvres II*, éd. Plé., p. 45. 宗教的儀式に関する描写や言及は他にもたとえば Ibid., pp. 149–150, 309; *Œuvres I*, éd. Plé., pp. 317–328. などがある。

29′ cf. ①Jean Richer: *Gérard de Nerval*, éd. Seghers, 1965. pp. 30–38, ②Léon Cellier; *Gérard de Nerval*, éd. Hatier, 1963, pp. 67–82. さらに伝記的にネルヴァルの「演劇」の問題を扱っているものとしては ③A. Marie: *Gérard de Nerval, le poète et l'homme*, éd. Hachette, 1955, pp. 109–179.

30′ この Ronde ないし cercle de ronde (歌いながら輪になって踊る遊び) はネルヴァルにあっては特別の意味—「まるで天国にいるように感じた」子供時代の、いわば特権的状態を象徴的に喚起するものとしての意味—をもっている。cf. J.-P. Richard: *Poésie et Profondeur*, pp. 67–77 なおこの遊びは『シルヴィ』(*Œuvres I*. éd. Plé., pp. 268–269) や『アンジェリック』Ibid., pp. 215–216) などに描かれている。

31′ *Œuvres I*. éd. Plé., p. 161.

32′ Ibid., pp. 278–279.

33′ *Œuvres II*, éd. Plé., p. 338.

34′ *Œuvres I*, éd., Plé., p. 180.

35′ Ibid., p. 174. 同じ例をもう一例。《Hé bien, comprenez-vous que l'entraînemnt d'un récit puisse produire un effet semblable; que l'on arrive pour ainsi dire à s'incarner dans le héros de son imagination, si bien que sa vie devienne la vôtre et qu'on brûle des flammes factices de ses ambitions et de ses amours! 》(Ibid., p. 174).

36′ Jean Richer: *Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951, p. 291.

37′ J.-P. Sartre: *L'Imaginaire* éd. Gallimard, 1940, p. 242.

38′ cf. L. Lévy-Bruhl: *La Mentalité Prinitive*, ed. Félix Alcan, 1933. ことに同書第三章「夢」Les Rêves を参照されたい。《L'Indien ne faisait donc pas de différence entre l'acte commis en rêve et l'acte commis en plein jour à l'état de veille: les deux formes d'expérience étaient équivalentes à ses yeux. 〔.....〕 Ce qu'il a vu en rêve est réel...》 (Ibid, pp. 103–105)

39、Johan Huizinga: *Homo Ludens*, trans. by Hull, Routledge & Kegan Paul Ltd., London 1949, p. 25.

40、*Œuvres II*, éd. Plé., p. 346.

41、Jean-Pierre Richard, op. cit., p. 58.

42、ネルヴァルの精神に認められる神秘主義的（オキュルト）、ないし秘教主義的（エゾテリック）な側面を強調する研究家の多くはこの見解に同意しているように思われる。たとえばアルベール・ベギャン、フランソワ・コンスタン、ジョルジュ・プレーなど。

43、Johan Huizinga, op. cit., p. 11.

44、op. cit., pp. 57–58.

45、*Œuvre I*, éd. Plé., p. 431.

46、*Œuvres II*, éd. Plé., p, 1065.

47、Ibid., p. 376.

48、*Œuvres I*, éd. Plé, p. 353.

49、*Œuvres II*, éd. Plé., p. 92.

50、ネルヴァルにおける rêves 夢や想像世界の意義に関して深い洞察を示したものとしては Albert Béguin: *Gérard de Nerval*, éd. José Corti, あるいは George Poulet: *Sylvie ou la pensée de Nerval, dans les trois éssais de Mythologie romantique*, éd. José Corti などがある。また彼の夢や幻想の心的及び存在論的な意義をイマージュから検討したものとして J.-P. Richard: *Géographie magique de Nerval*, dans *Poésie et Profondeur*, éd. du Seuil とか George Poulet: *Nerval et le cercle onirique*, dans les *Cahiers du Sud*, n° 331. 一般的な考察及び source の研究としては Jean Richer: *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques*, éd. Griffon d'Or; *Nerval, expérience et création* éd. Hachette などがある。

51、アウェルバッハ『ミメーシス』（篠出一士、川村二郎訳、筑摩書房昭和四十二年）一一〇頁。

52、*Œuvress II*, éd. Plé., p. 744.

53、たとえば *Œuvres I*, éd. Plé., pp. 367, pp. 375–376, p. 385, etc.

54、*Œuvres I*, p. 173.

55′ Ibid., p. 864 (Corres. n°85), p. 888 (Corres. n°99), p. 1030 (Corres. n° 257). p. 866 (Corres. n° 86), etc.

56′ Ibid., p. 133.

57′ *Œuvres II*. éd. Plé., p. 19.

58′ *Œuvres I*, éd. Plé., p. 131.

59′ Albert Béguin, op. cit., p. 100.

60′ 注 10 参照

61′ Jean Richer; *Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° p. 1054, 1951, p. 291.

62′ *Œuvres I*, éd. Plé. p. 390.

63′ Ibid., p. 413.

64′ J.-P. Richard, op. cit., p. 85.

65′ *Œuvres I*, p. 414.

66′ Albert Béguin, op. cit., p. 62.

67′ Ibid., p. 62.

68′ *Œuvres I*, éd. Plé., p. 363.

69′ A. Béguin, op. cit., p. 36.

70′ Ibid., p. 62.

71′ Ibid., p. 62.

72′ Boris de Schlœzer: *L'Œuvre, L'Auteur et L'Homme*, dans les *Chemins actuels de la critique*, éd. Union générale d'Éditions, 1968. pp. 90-91.

73′ J.-P. Richard, op. cit, p. 85.

74′ Ibid., p. 85.

75′ Ibid., p. 85.

76、Ibid., p. 85.
77、Ibid., p. 85.
78、Ibid., p. 85.
79、A・ベキャンはネルヴァルとランボーの類似性を両者に共通する《Enfer》の問題から論じているが、私には少なくともその「詩質」という点から考えた場合、両者は本質的に異なっているように思われる。両者の異質性という問題は今後の研究課題としたい。
80、Jean Richer: *Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951, p. 291.
81、J.-P. Richard, op. cit., p. 89.
82、op. cit., p. 78.
83、Jean Richer: *Neral et ses Fantômes*, dans le *Mercure de Frace*, n° 1054, 1951, p. 291.
84、J.-P. Richard, op. cit., p. 98.
85、Ibid., p. 85.
86、*Œuvres I*, éd. Pléiade, p. 416.
87、Ibid., p. 116.
88、Ibid. p. 432.
89、J. Richer 編 *Gérard de Nerval, Le Carnet de Dolbreuse*, éd. Minard, 1959, pp. 65–66.